



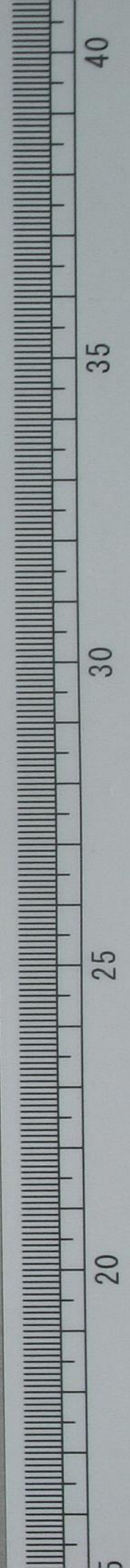
偶評

今體名家文抄

土居光華編選

四五

柳田文庫  
 文庫11  
 A1395  
 3





文庫11  
A1395  
3

柳田泉文庫



偶評

今體名家文抄卷之四

土居光華編選

萬法精理序 原漢文 木戸孝允

萬法精理ノ  
序凡人ヨシテ  
作ラシメバ  
張騰明目法  
律ノ根本政  
事ノ得失ヲ  
論シ盛ニ此  
書ノ有益ヲ  
説カニ却テ  
平々昔日ノ  
談話ヲ把テ  
此一篇ノ好文

禮之何兄ノ嘗テ余ト歐洲ニ在ルヤ。屢余ニ語テ  
曰。歐洲諸國ノ學術工藝。一端ヲ叩テ盡ス可キニ  
非ズ。而シテ近時西書ヲ譯スル者。日ニ増シ月ニ  
多ク。而シテ百科ノ譯本。其世ニ行ナハル者。概テ  
斷篇單牘。首尾串セズ。以テ其ノ全彪ヲ見ルニ足  
ラズ。甚々歎惜ス可キナリ。吾輩若シ譯述ニ從事

今體名家文抄卷之四



字ヲ成ス此  
公獨リ國家  
運論吏ニオテ  
ルヲミナラザ  
ルヲ

青尼云々照  
應

三所以ノ字  
ヲ聯下ニシテ  
章類ノ宛轉  
者字用并

セバ、必ズ其一科ヲ全クシ。必ズ其周備ヲ極メシ  
ト。余深ク其言ヲ是トス。頃日何兄官暇ヲ以テ佛  
國孟德斯氏ノ萬法精理ヲ譯シ、以テ世ニ公ニセ  
ント欲シ。而シテ序ヲ余ニ請フ。余聞孟德斯鳩氏  
者通國ノ碩學、而シテ尤モ法律ニ精シ。爾來諸國  
其書ニ因テ、其治績ヲ舉ル者蓋シ數ナカラス。今  
ヤ何兄ノ此書ヲ譯ス、首尾串全、果テ前言ヲ食  
サレナリ。學者苟モ此書ニ就キ、而シテ法理ハ妙  
用ヲ求ム。其元氣ト相流發ス。所以其邦土風  
俗ト相變更ス。心所必、其人事百為ト相動息ス。心

得テ好

所以ハ若森然此中ニ具ル。幹ハ少條アリ。以テ治  
本ハ未カク盡スニ足ラシ。何兄此舉ノ如キハ、獨  
リ課業ノ責ヲ盡スノミナラス、亦以テ國家ノ治  
績ヲ助クルニ足ランカ。明治八年七月、松菊木戸  
孝允撰

比斯馬爾克傳序 原漢文

木戸孝允

一國ハ盛衰果シテ一人ハ賢否ニ由ルカ。余未ダ  
之ヲ知ラサルナリ。人民ハ智愚果テ土地ハ形象  
ニ由ルカ。余未ダ之ヲ知ラサルナリ。邦國ハ成敗

未ダ語ヲ用  
井文字ノ曲  
折ヲ取ル乃  
此公慣手法

比斯馬爾克傳序 原漢文

二



果テ時世ハ運ニ由ルカ。余又之ヲ知ラザルハハ  
方今歐州諸國孛國最モ強ト稱シ。而シテ其人材  
比斯滿耳克氏最モ尤ト稱ス。余曾テ其名ヲ聞キ  
未夕其人ヲ知ラス。歐州ニ副使タルニ及テ經巡  
ノ次、伯倫府ニ之キ親ク其官僚ト相見。始テ公館  
ニ上ル。其眼光炯射威度人ニ加ル者。問ハスシテ  
其人比氏為ルヲ知ルナリ。既ニ相接ス。及テ  
ハ笑語温籍。寬嚴節。不ハ絶テ圭角ナシ。蓋シ亦希  
ニ觀ノ偉傑ナリ。退テ人ト語り益其事業ヲ詳シ  
即孛國ノ威風其四隣ヲ凌駕シ。而シテ五洲ニ發

古今英雄  
人トテ大抵此  
襟ノ人多ク  
乃英雄ノ英  
雄タルヲナリ

所謂云々此  
等ノ實皆照  
應ノ法トナリ

便且捷盛且  
繁句法

三者云々前  
ヲ收メテ後ヲ  
起ス法也  
落ノ處此等

揮スルモノ偶然ニ非サルヲ知ルノリ。所謂一國  
ハ盛衰ハ人ハ賢否。由ル者果テ非カ。其地為ル  
魯佛ト接シ。而シテ埃英ト連ナリ。電線鐵路ノ便  
且捷。商旅賓客ノ盛且繁。新知並ヒ争ヒ。奇工迭ニ  
競フ。所謂人民ハ智。果テ土地ハ形象ニ由ル者  
果テ非カ。其内黨流分裂ノ禍ヲ除シ。外埃佛驍炎  
ノ勢ヲ挫ク。是固ヨリ諸豪雄畧ノ致ス所ニ出ル  
ト雖モ。所謂時世ハ運ニ由ル者果テ非カ。今日ハ  
孛國ヲ見ル。此三者皆備ハハザルナシ。其歐州ニ  
雄タル亦宜ハハラス。然ラハ則シ三者備ハラヌ



ノ工夫ナケ  
レハ文章前  
後ノ接續ヲ  
成サス

一結亦成應  
法ナリ

將ニ其ノ杜撰人民ヲ棄テ、而シテ止マントスル  
カ、否、苟モ事ニ任スル者一致推誠、何ソ必ス非常  
ノ材ヲ求ニヤ、國自カラ習慣アリ、恃テ以テ基ヲ  
開ク可シ人自カラ知能アリ率テ以テ材ヲ達ス  
可シ、短ヲ我ニ捨テ長ヲ彼ニ取り、務テ教育ヲ敦  
ウシ漸ク政紀ヲ修メ、累ニ歲月ヲ以テシ、而シテ  
勉強怠タラサレハ、則其成就スル亦知ル可キノ  
ミ、上地ト時運トハ如キ言フニ足ラサル也、遂ニ  
以序ス、明治八年八月、木戸孝允撰弁書  
江月齋遺集序 原漢文 木戸孝允

雙關起法

應小東

時務ヲ知ハ俊傑ノ責ナリ、大節ヲ持ハ剛者ノ事  
ナリ、而シテ蓋其人希ニアリ、亡友坂實甫少小ヨ  
リ學ヲ好ミ、剛毅卓立、俯仰俗ニ隨ハス、慨然天下  
ノ務ニ志アリ、屢常武京攝ノ間ニ來往シ、與ニ交  
ル所皆當世ノ魁傑、時事ヲ討論シ、獻替憚ルナシ、  
初我長ノ藩府、氣節ヲ以テ相尚フ者、吉田義卿ノ  
徒最モ盛トス、而シテ其切實莫ニ任スル者、能ク  
實甫ニ若クモノ莫シ、故ヲ以テ義卿既ニ没ス、後  
實甫ノ風ヲ聞テ興ル者亦少カラズ、時務ヲ知ル  
者、非ソ安ソ能ク此ノ如クナラズ、甲子京師

雙關起法



變。實甫方ニ某公ニ謁シ事ヲ請フ。會敵軍大ニ至ル。實甫毫モ聲氣ヲ動カサス。諄々大義ヲ説テ息マス。用井ラレス。而シテ始テ去ル。乃衆ト敵ヲ衝キ快戰。身重傷ヲ負ヒ。而シテ退キ。遂ニ自殺ス。將ニ死ニトス。衆ヲ顧ミテ曰ク。吾止。諸君其レ勉ヨ。絶テ窮迫ノ態ナシ。大節ヲ持ス者。非ス安ヨ。能ク此ハ如クナラニヤ。世ノ文學ノ徒亦多シ。而シテ訓話ヲ之レ務メ。嘗テ世事ノ何物為ルヲ問ハス。聲利ニ汲々。而シテ圖書ノ間ニ老ル者。大卒是ナリ。義勇ノ士亦乏シカラス。而シテ或暴馬ノ

厭應小束

文學ノ徒是  
客義勇ノ士

是主

再束上ニ段  
ヲ收

快血氣ニ拘拘。而シテ巖牆ノ下ニ立者。大卒是ナリ。實甫ノ若キ者。此ノ輩ト相去遠シ。之ヲ俊傑ト謂ヒ。之ヲ剛者ト謂フ。抑モ非カ。實甫死時年二十有五。惜ヒカ之ヲシテ猶ホ世ニ在リ。益其志ス。所ヲ盡サシメハ。則其成就スル所必ス。此ニ止マラサル可シ。余ノ變ニ投ズ。實甫ト同ク。而シテ死生及テ道ヲ殊ニシ。瓦全ヲ得テ今日ニ及フ。而シテ今日ノ昔日ト。時世ノ泰否。遭逢ノ辛甘。豈唯天淵ノミナランヤ。抑モ經世ノ事。先ヲ為ス者アリ。之カ後ヲ為ス者アリ。苟モ先後シテ互ニ其功



一結起頭ノ  
後標下剛者  
ヲ會書ス是  
ヲ讀中取應

ヲ全ウス豈先者獨リ其始ニ勞シ。而シテ後者則  
其終ニ逸スト謂ハンヤ。然リ而シテ天日ノ再中  
スル者。茲二十年。天下ノ事。余輩庸劣。能ク為ス  
所ニ非スト雖モ。而シテ苟モ既ニ其ノ職ニ在ル  
者尸素ノ責固ヨリ免レサル所。又安ソ之カ後々  
ルニ在ランヤ。若シ實甫ヲシテ地下ニ知ラ使メ  
ハ其レ將ニ之ヲ何トカ謂ハシ。頃者熊谷縣令揖  
取君素彦。將ニ其遺稿ヲ刺セントス。余ニ屬テ之  
ヲ序セシム。余受テ之ヲ閱ス。正氣凜然。光欲萬丈  
儼ト其人猶在。ハ覺ハ卷ニ對シ。怵愧之ヲ久ス。明

ノ結法ト云

治九年三月參議木戸老允撰

英國議院章程序 原漢文

木戸孝允

天下ヲ公ニスルノ道ハ議院ヨリ善キハナシ。而  
シテ議院ヲ設グルノ可否ハ。則人民ノ智不智ニ  
存ス。蓋シ人民既ニ智ニシテ之ヲ設カハル者ハ  
是レ民ヲ賊スルナリ。人民未タ智ナラス。而シテ  
之ヲ設クル者。是レ政ヲ亂ルナリ。民ヲ賊スルト  
政ヲ亂ルト皆為スヘカ。ハルナリ。而シテ世ノ  
事ヲ論スル者。概ネ其一片ヲ持シ其可ヲ言フ者

雙關法又雙  
結法

今豐名家文抄卷四



未夕嘗テ其否ヲ問ハサルナリ。其否ヲ説ク者未  
 タ嘗テ其可ヲ講セサルナリ。之ヲ可ト曰ヒ之ヲ  
 否ト曰フ。之ヲ要スルニ瑾々論者ハ能ク議定ス  
 ル所ニ非カルナリ。若シ夫ノ一國ノ公衆畧能ク  
 理國經世ノ何物為ルヲ知辨スルニ至ルコトキ  
 ハ、示諭ヲ廢セス而シテ其實始テ見ル。本邦王政  
 一新。日尚ホ淺シ。教育未タ洽子カラス。今ノ時乃  
 チ議院ヲ設クルノ時カ。余其説ヲ得サルヤ久シ  
 幸ニ村田氏ノ此譯アルニ遇フ。試ニ此卷ハ發兌  
 ニ隨テ以テ人意ハ向ハ所ヲトセハト欲ス明治

九年三月松菊狂夫

斯氏農書序 原漢文 大久保利通

凡ソ古典古  
 語ハ用井得テ  
 他ニ移日勿ス  
 へカテガルヲ  
 要ス此農書  
 三冠元二天祖  
 瑞穂ノ字ヲ  
 用テ如キハ  
 實ニ切實切  
 當交換移易  
 スヘカラサルモ  
 ノト云フヘシ而  
 シテ未段明  
 時ノ民、民守  
 農書ニ於テ  
 亦欠クヘカラ

天祖瑞穂ヲ以テ蒸庶ニ惠シ而シテ我神州農ヲ  
 以テ國ヲ為ス我民實ニ未耜ニ開ス泰西我國事  
 ヲ紀スル者言アリ曰ク經驗ハ久シキ能ク國民  
 ヲメ瘠ヲ變シ沃ト為スハ術ヲ知ラ使ハ山谷氷  
 雪ハ間尺寸遺地ナキニ至ルト此レ蓋シ過辭ニ  
 非ルナリ但農學一科未タ開ケス農師其人ニ乏  
 ク百姓日ニ用井而シテ其然ル所以ヲ究ムル能  
 ハス。聖天子軫ク蒼生ノ未タ蘇セサルヲ念ヒ



サル語ト云フ

抑農事至難一轉以テ  
枚拾篇ニ成  
スニ至ル其  
跡ヲニスル  
幾クニ云々  
應法ニテ  
著者ニ非

勸業寮ノ寮ヲ設ケ、以テ農業ヲ講習シ、而シテ農  
始テ學アリ。岡田好樹、内務省ニ官ス。頃者英國斯  
氏ノ農書ヲ譯シ、之ヲ世ニ公ニス。斯氏自ラ謂フ  
是ノ書ヲ著ス二十年。方ニ其效ヲ見ルト、余深ク  
好樹ノ此舉其務ムル所ヲ知ヲ嘉ス。方今、世文明  
ニ際シ、百科並ヒ進ム、而シテ農尤急タリ。是ノ書  
ノ民ニ裨益スル、蓋少小ニ非ス。抑農事至難、斯氏  
亦曰、農學者忍耐著實ニ非レハ、以テ其業ヲ終フ  
ヘカラスト。學者此ニ從事シ、忍耐著實以テ大成  
ヲ期セハ、庶幾クハ天祖ノ嘉賜ニ酬ヒ、而シテ明

ザルヨリハ此  
等ノ好書ヲ  
成ス能ハル  
ナリ

時ノ民タルニ負カリル也。明治八年十二月、參議  
兼内務卿從二位大久保利通撰  
英國議院章程序  
伊藤博文  
英國議院章程譯成ル、議院ノ式目載セテ餘蘊ナ  
シ。民選議院ノ說一タヒ世ニ行ハレ、諸子ノ譯述  
陸續トシテ出、而シテ其細條詳目ニ涉ル者ハ實  
ニ此書ヲ以テ初トス。蓋シ中世英國ノ風ニ議院  
ノ設アリシヨリ、大陸諸州皆之ニ典型ス、而シテ  
其成跡ヲ見ルニ各具體裁ヲ異ニシ。一モ英國ト  
結果ヲ同ウセサルハ何ゾ。是其設置宜ハ得カ

イギリス議院章程序



兩カノ字ヲ  
用井筆勢福  
愛

客ヲ借リキ  
ヲ形ス

ルニ出ルカ。抑亦別ニ由テ來ル所アルカ。之ヲ史  
乘ニ徵スルニ。英國議院ハ初ヨリ。理論ニ生セズ  
シテ實務ニ起ル。一步ヲ進ム。一層ヲ加ヘ。漸次ニ  
基ヲ固クシ。舊貫ニ仍リ。補シテ之ヲ綴シ。保シテ  
之ヲ持シ。時ト與ニ推移シ。而シテ能ク自由ハ精  
神ヲ完全シ。民權ヲ擴充スルハ成跡ヲ為セリ。彼  
ノ佛國ノ一大憲法ヲ制定シ。丕切ヲ一世ニ奏ス  
ルモ。孰ニ反シ機ニ背キ。遂ニ大乱ノ地ヲ為シ。今  
ニ至テ一定ノ政體ヲ二十年ノ久シキニ履行ス  
ルコトアルヲ見サレ者。豈獨リ蓋世ノ英雄ヲ出

主客小攷

シ。激烈ノ改革ヲ行フノ致ス所ノミナランヤ。之  
ヲ要スルニ。其人情形勢ノ自カラ英國ニ異ナル  
ニ非サルコトヲ得シヤ。夫レ既ニ人情ヲ殊ニシ。  
又形勢ヲ同ウセス。獨リ佛國ハ之ニ非ズ。大陸諸  
州ハ議院英國ニ比シテ。其體裁ト結果トヲ別ニ  
スルモ亦怪シム可キニ非サル也。政ヲ論スル者。  
要スルニ自カラ其國固有ノ性質タル人情形勢  
何如ヲ詳ニスルニ在ル哉。之ヲ序トス。明治八年  
十二月。伊藤博文撰

北支那戦争記序 原漢文

體名家文抄卷四



慨然二字の  
モ見ル可カラ  
ス乃此篇  
泉源ニ其  
哉憐ナルヤ  
辱アラシヤ  
慨ル而已  
ナヤ皆此  
慨然守リ  
根柢湧出ス

字々

英人某ノ著ス所ノ北支那戦争記譯成ル。余之ヲ  
讀シ。慨然卷ヲ掩テ嘆テ曰ク。甚哉清國ノ禍也。城  
池守ラズ。宗廟保タズ。君臣惶遽出走。終ニ城下ノ  
盟ヲ為スニ至テ止。何ゾ其慘ナルヤ。蓋シ我亞細  
亞洲ノ歐米諸州ニ於ル。一ハ則鎖國自カラ足り。  
一ハ則航海往來。境土ヲ拓テ先務ト為ス。其  
風俗人情大ニ相ヒ同シカラズ。而シテ大抵我ノ  
彼ヲ視ル。仇讐ニ異カラズ。曰ク夷狄ナリ。禽獸ナ  
リ。我ヲ窺竊スルナリ。而シテ清國最モ甚ト為ス。

大隈重信

是故ニ道光鴉片ノ亂。一敗地ニ塗レ。流血未タ乾  
カズ。又此禍アリ。平時自カラ堂々中華ト稱シ。一  
旦事アル。歐人ノ蹂躪スル所ト為ルヲ免レズ。先  
後二役其跡異ト雖モ。其由ル所ヲ考レハ。未タ嘗  
テ風俗人情ノ陋且固ニ原カサルアラシムナリ。  
然ト雖モ交ヲ締ヒ。盟ヲ訂シ。信義相ヒ親ム。宇内  
萬國ノ公道。苟モ國均ヲ秉ル者其陋ヲ革ム。其固  
ヲ去リ。誘導振作。能ク其方ヲ得レハ。則舊習ノ弊  
得テ除ク可シ。向ニ清國ヲハ慮リ。此ニ出テシハ  
ハ。則其或ハ禍亂ヲ未萌ニ銷シ。而シテ城池守ル

字々

大隈重信



反結一句限  
等結法評  
頭一歩進  
上段卷ヲ掩  
テ歎ヒテ曰  
字及ヒ大抵我  
ノ彼ヲ視ル  
等ノ處ニ面額  
シ結尾ヲモ  
モニテ題外  
出テ結シモ  
如シ終其寶  
題中ヨリ通  
出シテ下リ

可。宗廟保ツ可。又烏ッ君臣出走。城下ハ盟ヲ  
為ス。辱ハ云。吁。是豈獨リ清國ハ為ニ慨スル  
而已ナラン。又明治七年十月。大隈重信撰

商家心携序

前島

密

亞細亞ノ歷世ヲ通觀スルニ。概シテ商ヲ賤スル  
風習アルハ。乃建國ノ法ニ原由スレ。其商タル  
モノ。大抵不學ニシテ商ハ國力ニ關係シ。經濟上  
ノ要部タル本分ノ理ヲ明ニセス。徒ニ錙銖ノ利  
ヲ争ヒ。隴斷ノ私ヲ圖リ。自ラ卑シキニ居ルルニ  
因レリ。若シ夫ハ荒洋萬里。日ヲ刻シテ航ルハ火

爛。流麗骨  
カ。韻度  
李歐神髓ヲ  
得タリト云フ  
ヘレ

此公大藏省  
十二等出仕  
ヨリ起リ今日  
内務ノ少輔  
至ル實ニ海内  
ノ偉人ト云フ  
ヘシ然ラズ名  
商タルモ或ハ  
明相タランモ  
一向夫子也ニ  
自家身上ノ  
事ヲ道破ス

船。遼遠。一瞬度ヲ異ニシテ走ル。汽車。多クハ之ヲ  
商賈ノ手ニ成シ。地球ヲ繞ル。電信線。世界ニ達スル  
郵便道。最モ通商ニ用ニ供。農耕ノ利アル。工作  
ノ益アル。亦全ク貿易ノ精シキニ依賴スルノ理ヲ  
曉ラハ。何ソ獨リ士大夫ヲ貴トシ。商賈ヲ以テ賤ト  
セシヤ。名商タルモ。或ハ明相タランモ。必ス理ナ  
シト謂ベカラン。今ヤ世運ノ一新ニ際シ。國憲以テ  
同等自主ノ權ヲ護シ。通商以テ内外ノ地ニ至リ。商  
賈モ漸ク奮勵ノ志氣ヲ興スモ。奈何セン。吾邦學ノ  
未タ其法ヲ訓導セサル。書ノ未タ其道ヲ講明セサ



者カ

結末亞細亞ノ字ヲ脱セス

先師森田節翁今世名家

ル。是ヲ以テ商者猶自ラ卑屈シテ、其本分ノ理ヲ伸  
ベズ、通商未タ大ニ農工ノ利ヲ賛セズ、實ニ奮勵者  
ノ痛苦スル所、吾輩ノ浩歎スル所ナリ、蓋シ譯者ノ  
此舉、亦是ニ慨然スルニ因ルナラン、請フ天下ノ商  
者、知識ノ門ヲ茲ニ開キ、終ニ商ノ國力ニ關シ、經濟  
上ノ要部タルベキ理ヲ明ニシ、以テ富強ノ基礎ヲ  
建テ、亞細亞古來ノ陋習ヲ脱セハ、大ニ國家ノ幸福  
ナリト、聊カ所思ヲ筆シテ序言トス、前島密撰

輿地新圖序 原漢文

秋 月 種 樹

各國境界、色ヲ以區別シ、五彩爛然、群英紛敷スル如

文集ヲ評シテ  
曰拙堂學ヲ  
以テ勝チ布山  
氣ヲ以テ勝チ  
富浦オコヲ以テ  
勝チ小竹オオ  
氣ヲ學チ登  
小品序文往  
々見レ可キモノ  
アリト、其小竹ヲ  
評スル稍過刺  
ト雖モ能ク四  
家ヲ評盡不  
云ヘシ此公此  
篇所謂ノ氣  
ヲ以テ勝チ  
テ小竹翁序文  
ノ佳計ニ駕ス  
ヘシ然ニ西村  
先生ノ諸序

キハ、是輿地圖之定式、而大小ノ變化以テ認ム可キ  
也、余去年、獨逸伯靈ニ遊ヒ、輿地沿革圖ヲ得、其州郡  
ヲ閱スルニ、古昔紅ナル者、中世變テ白ト為リ、中世  
白ナル者、今代又變テ綠ト為ル、因テ嘆テ曰、嗚呼國  
ノ盛衰強弱何ソ測ル可ケンヤ、拿破烈翁ノ英邁千  
古獨秀ノ如キ、陳蹟殆ト歐洲ニ遍ク、兵鋒過ル所雷  
霆ノ如ク、人皆震懼而シテ、今則其孫英ニ客死シ、巴  
黎宮殿ヲ顧望セハ、特ニ馬車往來燒痕毀跡、而シテ  
其境土間亦敵國ニ屬ス、今ヨリ已往各國版圖幾變、  
而シテ竟ニ何色ヲ為スヤヲ知ラス、大抵世界形勢



學了識了  
拙堂翁二似  
タルニ如カサ  
リ

那破烈翁再  
生

魯ハ歐洲ヲ吞噬セント欲シ、獨逸兵カヲ以テ之ヲ  
支ハ、英迢ニ之カ應援ヲ為ス、而シテ米利堅ハ則其  
舉動ヲ覘フ、一州ノ封建廢シ、而シテ世界ノ封建未  
タ廢セズ、互ニ其私意ヲ競フ、是レ何ソ以テ公法ト  
稱スルニ足ラン、必ヤ萬國ヲ混シテ一州ト為シ、百  
王ヲ廢シテ一帝ニ歸シ、兵用ウルナク、國争フナク、  
彼我一視、四海協同、地圖ヲ製スル者、一色ヲ以テ之  
ヲ抹シ、然後真ニ文明開化ノ世ト謂フ可キナリ、顧  
ニ造物者之ヲ欲セサルカ、將ニ之ヲ欲シテ未タ能  
ハサルカ、村田文夫先生、輿地新圖ヲ譯シ、余ノ言ヲ

索ム、余因テ之ヲ質ス、時明治七年第一月秋月種樹

童蒙教草序 偏澤 諭八吉

大凡ソ天下ノ事物一利アレバ、必ス亦一害ナキヲ  
得ズ、蓋シ其弊ハ分限ヲ知ラザルノ罪ナリ、方今我  
邦ニ西洋ノ說漸ク行ルト雖、其說ノ由テ起ル源  
ヲ尋レバ、大概外人一夕ノ茶話ヲ聞キタル者カ、或  
ハ新聞紙ニ等シキ數卷ノ譯書ヲ讀タル者ニ過キ  
ス、半解半知其一ヲ知テ其二ヲ知ザルトキハ、大ニ  
事物ノ分限ヲ誤リ、未タ一利ヲ得ズシテ、先ツ其害  
ヲ見ルヲアテシ、經濟ヲ談シテ分限ヲ知ザレバ、利

今禮名家文抄卷四



先生每三其  
言下欲スル  
所ヲ言ヒテ  
了リテ止ム  
而シテ其際  
自カラ章法  
句法ヲ收束  
變化開合ヲ  
是又文全  
子ノ及見必  
ナリ

二走ルノ弊アリ。窮理ヲ説テ分限ヲ知ザレバ。天ヲ  
 恐レザルノ弊アリ。清潔ヲ貴ブトバ。衣服居住ニ奢  
 侈ヲ極ル者ハ口實ナリ。滋養ヲ重ニスルトバ。酒食  
 二耽ル者ハ遁辭ナリ。勇敢ハ亂暴ニ陥リ。簡易ハ粗  
 嫚ニ流ルハ。等。枚舉ニ遑アラス。就中彼ノ洋學者流  
 ガ。英亞諸國ノ史類ヲ讀ミ。自主自由ノ趣旨ヲ誤認  
 シテ。之ヲ放肆無賴ノ口實ニ用ル等ノ一アラバ。其  
 世教ニ害ヲ為ス。一舉テ云フ可カラズ。余輩竊ニ之  
 ヲ憂ル。久シ。依テ今茲ニ英人チヤンブル氏必著  
 ノ。モラルカラス。石クト。題セル書ヲ翻譯シテ。童蒙

ノ讀本ニ供セリ。願クハ後進ノ少年。諸學入門ノ初  
 二。先ッ此書ヲ讀ミ。慎獨脩身。以テ分限ヲ誤ラス。次  
 第二物ニ接シ。人ニ交ルノ道ヲ明カニセバ。彼ノ經  
 濟窮理史類百般ノ學モ其實ノ裨益ヲ為シ。弊害ヲ  
 生スル。一莫カル可シ。書成ルニ及ヒ。英人タイトレ  
 此氏ノ萬國史中ヨリ。一章ヲ抄譯シ。テ序文ニ代ル  
 其文曰ク我本國ハ為メヲ思ヒ其國ヲシテ義理ニ  
 從ヒ。自由ヲ得セシメントスルハ。慷慨ハ氣ト云フ  
 可シ。盛徳ハ心ト稱ス可シ。一國ハ人民此氣ヲ存シ  
 此心ヲ抱ケルハ。禮義ハ風俗國中ニ浹洽スルハ證



ナリ。然リト雖凡茲ニ論ス可キ一事アリ。凡ク世ニ  
文字誤用ハ例少カラズト雖モ其字ヲ慢ニ弄テ真  
ハ意義ヲ失スルハ甚シキハ特ニ自由ハ二字ヲ以  
テ最トス。風俗敗壞シタル國ニ於テ自由ヲ唱フル  
者ハ必ス放肆無賴ハ輩ニテ其放肆愈甚シケレバ  
其自由ヲ唱フルハ聲モ亦愈喧シ。此輩ハ所謂自由  
トハ毫モ報國ノ義ニ關係スル所アルニ非ズ唯羈  
絆ヲ脱シ。限度ヲ越ルハ意ニ誤用スルハ之ニテ真  
ハ自由ニハ非ザルナリ。世人若シ其真偽ヲ糾サシ  
ト欲セバ試ニ其首魁ハ私ヲ顧ミ其黨與ハ行状ヲ

探索ス可シ。然テ自由ハ假面ハ脱シ。放肆無賴ハ真  
面目ヲ發見スルニ足ラズ。故ニ云ク世上ニ一報ハ惡  
風俗ト報國盡忠ハ赤心トハ同時同國ニ并立ツ可  
ラザルモハナリ。

學問ノ勸第二編端書

福澤諭吉

學問トハ廣キ言葉ニテ無形ノ學問モアリ有形ノ  
學問モアリ。心學神學理學等ハ形ナキ學問ナリ。天  
文地理窮理化學等ハ形アル學問ナリ。何レモ皆知  
識見聞ノ領分ヲ廣クシ物事ノ道理ヲ辨ヘ入タル  
者ノ職分ヲ知ルヲ學ブナリ。知識見聞ヲ開ク為



正喻夾寫流  
讀ノ際人ヲミテ  
覺ハス快トシ  
シ

ニハ。或ハ人ノ言ヲ聞キ。或ハ自カラ工夫ヲ運ラシ。  
或ハ書物ヲモ讀マザル可ラズ。故ニ學問ニハ文字  
ヲ知ル。一必用ナレ。古來世ノ人ノ思フ如ク唯文  
字ヲ讀ムノミヲ以テ學問トスルハ大ナル心得違  
ナリ。文字ハ學問ヲスル為ノ道具ニ云。譬ハ家ヲ  
建ルニ槌鋸ノ入用ナルガ如ク。槌鋸ハ普請ニ欠ク  
可ラザル道具ナレ。其道具ノ名ヲ知ノミニ云。家  
ヲ建ル。一ヲ知ラザル者ハ是ヲ大工ト云フ可ラズ。  
此シク此譯ニテ文字ヲ讀ム。一ノミヲ知テ物事ノ  
道理ヲ知ラザル者ハ此ヲ學者ト云フ可ラズ。所謂

此段最精米  
生色アリ

論語ヨミシ論語シラズトハ即是ナリ。我邦ノ古事  
記ハ暗誦スレ。今日ノ米ノ相場ヲ知ラザルモノ  
ハ。コレヲ世帯ノ學問ニ暗キ男ト云フ可シ。經書史  
類ノ奧義ニハ達シタレ。商賣ノ法ヲ心得テ正シ  
ク取引ヲ為ス。一能ハザル者ハ。是ヲ帳合ノ學問ニ  
拙ナキ人ト云フ可シ。數年ハ辛苦ヲ嘗ム。數年ハ執  
行金ヲ費シテ。洋學ハ成業スレ。尚一佃秋立ハ活  
計ヲ為シ得ル者ハ。時勢ハ學問ニ疎キ人ナリ。是  
業ハ人物ハ。唯此ハ文字屋ト云フ可キハ。其功能  
ハ。飯ヲ喰ハ字外ニ異ラズ。國ハ為ニハ無用ハ長物



經濟ヲ妨ハ食客ト云ハ云可ハハ故世業ニ學問ト  
ハ帳合モ學問トハ時勢ヲ察スルモ亦學問トハ何  
以必ズシモ和漢洋ノ書ヲ讀ムハハ以テ學問ト  
云フハ理ハ云ハ云此書ノ表題ハ學問ノスレト  
名ケタレ氏決シテ字ヲ讀ムノミヲ勸ルニ非ズ  
書中ニ記ス所ハ西洋ノ諸書ヨリ或ハ其文ヲ直ニ  
譯シ或ハ其意ヲ譯シ形アルトニテモ形ナキトニ  
テモ一般ニ人ノ心得ト為ルハキ事柄ヲ舉テ學問  
ノ大趣意ヲ示シタルモノ大リ先ニ著シタル一冊  
ヲ初編ト為シ尚其意ヲ擴テ此度ノ二編ヲ綴ル次

三四編ニ及ブ可シ  
輿地新圖序原漢教  
氷海ヲ破命ヲ海狗ハ淵試心熱沙外涉身ヲ  
駝鳥ハ巢ニ寄ス西人ハ地學ヲ攻ム勤不ハ謂ハ  
不然ハ而シテ開闢以來千餘年天下ハ地理未  
夕盡ク明瞭セラル者何ハヤ豈勤勉ハ未タ至ラ  
ルアルカ抑モ造物者秘スル所アリ然ルヤ本邦  
古ヨリ地理ノ學ナシ故ニ今日ニ至リ未タ國郡ノ  
大小山海ノ高深ヲ詳ニセズ支那ノ民地理ノ學ヲ  
知ルト雖氏其學迂疎鹵莽禹貢ノ後數千年ニシテ

抑字添得テ  
風致アリ



三可字下得  
テ辨然

未ク其舊軌ヲ脱スル能ハズ。然レハ則本邦支那ハ  
民ト地理ヲ知ラズト謂テ可。地誌ハシト謂テ可。勉  
強セズト謂テ可。西國ノ地理ヲ記ス和墨耳ヲ以テ  
始ト為ス。獨列米ニ至テ略備ル。中世以降地理ヲ論  
スルノ士大ニ起リ。始テ亞墨利加ヲ覓ル者アリ。始  
テ地球ヲ周ル者アリ。北氷野ヲ探ル者アリ。南氷洋  
ヲ究ムル者アリ。是ニ於テ天下ノ經緯高低水陸山  
海以テ地氣ノ寒温地質ノ厚薄人種ノ賢愚動植ノ  
榮枯之ヲ一圖ノ上ニ聚メ之ヲ一冊ノ中ニ容ヒ人  
ヲシテ一日瞭然タラシム。西人ノ如キ者地理ヲ知

三可字下得  
下シ生ラズト  
下ヲ開ク勉強  
ノ命脈

ルト謂テ可。地誌アリト謂テ可。勉強ト謂テ可。夫レ  
東國ノ富強大ニ西國ニ及ハサル者其民ノ勉強彼  
ニ及ハサルニ在ルニミ。今地學ノ事ニ就テ之ヲ論  
スルニ我カ居ル所ノ地吾自ラ之ヲ知ル能ハズ必  
他人之ヲ教フルヲ待テ而シテ後之ヲ知ル。是ノ如  
クナレハ則我既ニ一著ヲ彼ニ讓レリ。既ニ一著ヲ  
讓レハ則二著三著皆彼ニ讓ラサルヲ得ス。而シテ  
遂ニ其後ニ瞳若タルヲ免レス。造物者一視同仁。豈  
西人ヲシテ獨リ富強ヲ擅ニセ使ムルノ理アラニ  
ヤ。然ラハ則地球中猶ホ未タ審ナラサルノ區アル



既三轉尚勉  
強ノ字ヨリ根  
抵シ來ル

最我ノ國人  
云々上段本  
邦古ヨリノ句  
ニ歸著ス本

意此ニ在リ東  
九ノ可カラス

選ニ地句應  
ニテ收

一篇大意

者蓋シ造物者ハ東人ハ為ニ餘地ヲ留ムル者則東  
人為ニスル者宜ク奮發激勵其未タ知ル所ヲ  
知り其未タ究ム所ヲ究ム全地球ヲシテ未タ  
審ニセサルハ野未タ探クテサルハ海ナカテ使ム  
ハシ既ニ天下ノ地理ヲ知レハ則其礦山ヤ其物産  
ヤ悉ク之ヲ左右ニ取リ以テ我カ富強ノ業ヲ資ク  
ヘシ是ノ若クナレハ則東國ノ富強或ハ西國ニ駕  
軼ス可ク而シテ黃人ノ威力竟ニ能ク白人ヲ壓ス  
ルニ至ラン是レ吾カ東人ニ望ム所ニシメ最モ我  
カ國人ニ望ム所ノ者ナリ頃村田君著ス所ノ輿地

新圖ヲ閱ス精詳緻密細ニ天下ヲ形勢セリ他日豪  
傑ノ士雪山ニ躋リ熱野ヲ踏ム時此書必ス携ソフ  
ル所ニ在ラン因テ數言ヲ卷首ニ記シ以テ序ト為  
ス明治七年甲戌春三月西村茂樹撰  
校正萬國史畧序原漢文 西村茂樹  
國中ニ三權アリ曰ク立法曰ク行法曰ク司法三權  
平ヲ得レハ則其國安富尊榮三權平ヲ失ハハ則其  
國貧困傾圮何ヲ平ヲ得ルト謂フ立法ハ權民之ヲ  
執リ行法ハ權君之ヲ執リ司法ハ權官吏之ヲ執ル  
ヲ云フナリ何ヲ平ヲ失フト謂フ君三權ヲ併テ執

今禮名家家法抄卷四



此段ハ未ダ三權ノ理ヲ知ラサル論ス

此段西國ノ發シ僅ニ三權ノ理ヲ知論

リ。或ハ官吏三權ヲ併セ執ルヲ云フナリ。古時人智未タ開ケス。學術猶小疎ナリ。天下ノ人皆未タ三權ノ理ヲ知ラス。謂ヘラク。人君賢明。百司勤敏ナレハ。則以テ國ヲ治ム可ク。以テ民ヲ安ヌ可シト。是ヲ以テ世ノ稱テ明君賢相ト為ス所ノ者ハ。毎ニ力ヲ勞シ智ヲ竭シ。以テ其國ノ治安ヲ求ム。而シテ治安常ニ得可カラズ。或ハ轄ク之ヲ得ルト雖モ。久カラズシテ之ヲ失フ。竟ニ其民ヲシテ富庶ノ業ヲ樂ミ。教化ノ中ニ安ンセシムルヲ能ハサル也。西國發シ民權ノ說アリ。希臘羅馬ノ時。既ニ平民會議アリ。共和

此段ニ權平ヲ得ルヲ説

政治アリ。然レモ其法或偏私ニシテ公平ナラス。或ハ疎漏ニシテ精確ナラス。是ヲ以テ之ヲ一時ニ行フト雖モ。之ヲ永久ニ傳フルヲ能ハス。然レモ羅馬ハ共和政治ヲ以テ興リ。皇帝政治ヲ以テ亡フルカ若キハ亦以テ民權ノ能ク國ヲ護持ヌ可キヲ見ルニ足ルナリ。方今泰西ノ諸國ヲ觀ルニ。皆三權ヲ分執シテ其國ヲ治メサル者ナシ。就中英吉利ノ法。最モ善ヲ盡セリト為ス。而シテ米利堅ノ制又之ニ過久。英吉利ノ法。凡ソ國ノ大政。王ト貴族百姓ト合議シテ之ヲ行フ。貴族ノ議院ヲ上院ト曰ヒ。百姓ノ議

今昔名義考卷四



院ヲ下院ト曰フ。法制禁令財賦出入。人ヲ用ヒ政ヲ行フ。兩院ノ議ヲ經ルニ非サレハ。俱ニ行フヲ得ス。米利堅ノ制。上ニ君ナク。下ニ臣ナシ。立法ノ權。國會之ヲ執ル。會中ノ議員ハ。全洲庶民ノ公選ニ係ル。凡ソ其國事衆議ヲ以テ公ト為シ。政務私ナキヲ以テ貴シトス。法皆民立。權上ニ操ラス。二國ノ政教風俗天下ニ甲タル所以ノ者ハ。未タ嘗テ立政ノ其善ヲ盡スニ由ラサルニアラサルナリ。亞細亞諸國ノ若キハ。君主獨裁ニ非サレハ。則官吏權ヲ握リ。偏私ノ政ニ非レハ。則意ニ任スルノ政ナリ。其ノ富貴隆

此段三權ヲ失フヲ説

盛ノ歐羅巴。及ハリル者。人種ノ異ニ原ツクト雖モ。亦未タ嘗テ立政ノ其道ヲ得サルニ由ルニアラリ。大ニ全國ノ事務一日萬機。人君ニ三大臣ト。綜括遺ス。一無カラント欲ス。心ヲ焦シ慮ヲ殫ス。亦太タ苦シカラスヤ。全國ノ民ヲシテ分ツテ其責ニ任セシムレハ。則カヲ用ウルト少ニシテ功ヲ收ムルト大ナリ。其利害得失至愚ノ者ト雖。能ク之ヲ辨ス可シ。而シテ世ノ人君官吏動モスレハ。三權ヲ併セ執リ。而シテ肯テ之ヲ民ニ分タス。其故何ソヤ。已レノ權ヲ失フ。一ヲ恐ルレハナリ。世運日ニ進

此段三權ヲ分チ取ルヲ論



泰西史鑑中編序

人智ハ、關分問卷ノ民亦民權アルトヲ知ル。既  
ニ之ヲ知レハ、遂ニ之ヲ得ニトハ欲ス。然リ而シテ  
上之ヲ與ヘサレハ、則下必不起リ而シテ之ヲ奪フ  
是レ自然ノ勢ナリ。昔シ英國ノ議院ヲ立ルヤ、其初  
高門究ノ變アリ、而シテ後民權始テ定マル。世ノ英  
國ノ政ヲ學ハント欲スル者、能ク其害ヲ去リ、而シ  
テ其利ニ就キ、再ヒ高門究ノ亂ヲ起ス、無クシハ  
則幸ナリ、萬國史畧十卷、余往年京師ニ在ッテ、譯述  
スル所、今茲壬申夏、更ニ蕪ヲ芟リ、遺ヲ補ヒ、校正既  
ニ成ル、因テ此言ヲ以テ序ト為ス、其

入題又結束

泰西史鑑中編序 原漢文 西村茂樹

泰西史鑑中編刻成ル、因テ其首ニ序ニテ曰ク、支那  
ノ兩國ト、治亂興廢ノ迹同シ、而シテ治亂興廢ヲ論  
スル所以ノ說異リ、支那人謂國ノ大權、人主ノ獨リ  
握ル所、大權下ニ移レハ、則國從フテ亂ル、西人謂天  
國ノ為ニ民ヲ生シ、民ノ為ニ君ヲ立ツ、君君權アリ、  
民民權アリ、君權ヲ專ニセント欲スレハ、則國亂ル  
ト、支那人西人ト、其說相反ス、是ノ若シ、其故何ノヤ、  
地學ニ明ナル者能ク之ヲ知ル、西人ノ天下萬國ヲ  
論スル、概本蠢蒙、半化文明ヲ、以テ之ヲ分ツ、蠢蒙ノ

前編ハ結尾  
其編名ヲ顯  
シ此編ハ則起  
首直編名ヲ  
舉ク作文極  
避クル處

泰西史鑑中編序

世



地學ヲ祀テ  
政學ヲ發定  
斷ス何等見

國禮義ヲ知ラス。君臣ノ分ナシ。半化ノ國。君威ヲ以  
テ民ヲ制ス。或ハ君ト民ト權ヲ爭フ。文明ノ國。君民  
權ヲ同フス。或ハ民權重クシテ君權輕シ。支那ノ政  
教風俗。所謂半化ノ國ナル者ナレハ。則其說ノ西人  
ト相及ス。固ヨリ怪ニ足ラリナリ。若シ其說ノ是  
非常否ヲ論スルコトハ。則黑白清濁ノ辨シ易キ  
カ如シ。智者ヲ待チ而シテ後知ラサリナリ。支那人  
君ヲ以テ重シト為シ。民ヲ以テ輕シト為ス。故ニ君  
タル者獨リ威福ヲ擅ニシ。喜怒ヲ以テ賞罰ヲ為シ。  
愛憎ヲ以テ黜陟ヲ為ス。民タル者畏懼恐怖。唯君命

君ヲクテ國ヲ  
立云々此句  
十年前之ヲ  
有レハ則險語  
鬼藤ヲ破ルト  
評ヤルカラス  
然ニ今日其  
平々凡々見テ  
絶テ其奇且  
怪ヲ見ス人智

ニ從ヲ以テ務ト為シ。絶テ自主自奮ノ志ナシ。西人  
民ヲ以テ重ト為シ。君ヲ以テ輕シト為ス。故ニ君ヲ  
ル者法ヲ守リ教ニ循ヒ放恣ノ行ナク暴虐ノ政ナ  
シ。民タル者能ク自主ノ志ヲ立テ。國ノ為ニ心カラ  
竭シ。而シテ敢テ倦怠セス。夫レ民アリハ則國アリ。  
民ナケレハ則國ナシ。天下固ヨリ君ナクシテ國ヲ  
立ル者アリ。未タ民ナクシテ國ヲ立ル者ヲ聞カサ  
ルナリ。支那ト西國ト。貧富強弱ノ迹大ニ相懸絶ス  
ル者アレハ。則益其理ヲ明シ易キヲ知ルナリ。余西  
國ノ史ヲ譯シ。英民其君查爾斯ヲ弑シ。而シテ民主

今豐名家抄卷四



開化推テ知ル  
ハシ

却中終三難  
三解愈出テ  
愈快

政治ヲ立ルニ至リ。始ハ之ヲ怒ル。中ハ之ヲ疑ヒ。終  
ニ恍然悟ル。亦アルナリ。始ハ怒ル者ハ。英民ハ悖逆  
彼ハ如ク其甚キヲ怒ルナリ。中ハ之ヲ疑フ者ハ。悖  
逆ハ民而シテ其國ハ富強日ニ進ハテ疑フナリ。終  
ニ悟ル者ハ。君權擅ニスヘカラス民權奪フ可カラ  
キルハ理ヲ悟ルナリ。夫レ查爾斯ノ暴。秦ノ二世隋  
ノ煬帝ノ若キニ至ラス。而シテ弒逆ノ禍ヲ免レサ  
ル者ハ。君權ヲ擅ニシ而シテ民權ヲ奪ハント欲ス  
ルヲ以テナリ。英民ノ悖逆。朱温李自成ニ過キ。而シ  
テ其國富強蕃庶ナル者ハ。君權ヲ抑ヘ而シテ民權

一轉正意ヲ  
結出ス壁立  
千仞

ヲ立ルヲ以テナリ。西人論スル所。君民輕重ノ說其  
旨深哉。然ニ天下固ヨリ君ナク而シテ國ヲ立ル者  
アリ。此ノ如キノ國ニ在テハ。則君民輕重ノ說亦無  
用ノ論ニ屬ス。明治壬申春三月北總佐倉西村茂樹  
撰

今禮名表抄卷四



子附  
精光  
一轉  
五章

評偶  
今體名家文抄卷之四終

評偶  
今體名家文抄卷之五

士居光華編選

自助論第一編序 原漢文中 村正直

余是ノ書ヲ譯ス。客過テ問者アリ。曰ク子何ソ兵  
書ヲ譯セサルヤ。余曰。子兵強ナレバ。則國頼テ以  
テ治安ト謂フカ。且西國ノ強兵ニ由ルト謂フカ。  
是レ大ニ然ラス。夫レ西國ノ強。人民篤ク天道ヲ  
信スルニ由ル。人民自主ノ推アルニ由ル。政寛法  
公ニ由ル。拿破崙戰ヲ論シテ曰ク。德行ハカ身体

一頭兩脚垂手  
萬章篇ノ第  
三章ノ問答  
ヲ學ニ以テ  
綱領叫破

今體名家文抄卷五



且云々一意高層

ハカニ十倍ス。斯邁爾斯曰。國ハ強弱人民ハ品行ニ關ス。又曰ク。眞實良善品行ハ本タリ。蓋シ國者人衆相合ハ稱。故ニ人ハ品行正シクハ。則風俗美。風俗美ナレハ。則一國協和シテ一体ト成ル。強何ゾ言ニ足ラズ。若シ國人品行未ダ正シカラズ。風俗未ダ美ナラズ。而シテ徒ニ汲々乎。兵事ハ是レ講ズ。其陷テ鬪ヲ好ミ。殺ヲ嗜ムハ俗為ラザル者幾ト希レ。尚ホ何ゾ治安ハ之レ望ム可クヤ。且天理ニ由テ論スレバ。則強ヲ欲スルノ一念。大ニ正ニ悖レリ。何トナレバ。強ハ弱ニ對スル

以上國ノ治安ハ兵ノ強ニ賴ラザルヲ論

ノ稱ナリ。天斯民ヲ生ス。人々同ク安樂ヲ受テ同ク道德ヲ修メ。同ク智識ヲ崇ビ。同ク藝業ヲ勉メシメントス。豈此レハ強。而シテ彼レハ弱。此レハ優。而シテ彼レハ劣ヲ欲セシヤ。故ニ地球萬國。當ニ學問文藝ヲ以テ相交リ。利用厚生ノ道。互ニ相資益シ。彼此安康。共ニ福祉ヲ受クベシ。此ノ如クナレバ。則何ソ強弱ヲ較ベ。優劣ヲ競フアラシヤ。夫レ人天命ハ畏ル可キヲ知ル眞實ハ心ヲ以テ。良善ハ莫ク行フ。一人此ハ如クナレバ。一家此ハ如シ。一國此ハ如クナレバ。天下此ハ如シ。愛日仁



以上西國強  
兵三因ヲサ  
而巳テラス  
時却テ干戈  
ヲ戢ムル意  
ヲ論ス

風四海驛ヲ合シ。慈雲和氣。六合祥ヲ呈ス。此ハ如  
クナレバ。則亦何ゾ甲兵銃砲ヲ之イ用井ニヤ。古  
云ハズヤ。兵者凶器。戰者危事ナリ。仁者ハ敵ナシ。  
善ク戰フ者上刑ニ服スト。一人ハ命全地球ヨリ  
重シ。匹夫ノ善行。邦國天下ニ關係スル者アリ。乃  
チ土地ヲ貪ホルノ故ヲ以テ。至貴至重ノ人命ヲ  
シテ。横ニ極慘極毒ノ禍ニ罹ラシム。其皇天ノ意  
ニ違ヒ。造化ノ恩ニ負ク罪道ル可カラズ。西國近  
時大ニ刑罰ヲ省ク。然ニ猶ホ未ダ全ク干戈ヲ戢  
ムル能ハズ。豈ニ其教化未ダ洽ネカラザルカ。抑

歐歌收結

今昔ノ景光  
ヲ把テ而ヤ  
對比結構偉  
麗煉瓦石街  
ヲ過ルガ如シ  
肥富ノ亭ト  
云ハシ

宇宙泰運ハ期未ダ至ラザルカ。嗚呼六合ノ際。禮  
教盛ニシテ。兵刑廢ス。常ニホアル可キナリ。恨ラ  
クハ余子ト未ダ之ヲ見ザルカ。客唯々トシテ  
退ク。遂ニ書シ以テ卷首ニ弁ズ。歲次上章。敦牂。孟  
夏上浣。中村正直識。

自助論第二編叙原漢文中 村 正直

福ナル哉。今日西國ハ民ハ古ハ帝王ト雖モ。庸何  
シハ及ニヤ。昔者方隅自封。知識狹隘。今ヤ四海交  
通。學問淵博。昔者教化明カナラズ。風俗慘刻。今ヤ  
神明ヲ崇敬シ。志行虔誠。昔者君上權ヲ專ラニシ



今體俗家文抄卷五  
民奴隸ノ如シ。今ヤ人自主ヲ得テ共ニ公益ヲ謀  
ル。昔者法教禁アリ。人心ヲ強迫ス。今ヤ民自ラ擇  
ブニ任セ。王者問ハズ。昔者俗勇悍ヲ尚ヒ。動モス  
レバ仇隙ヲ生ズ。今ヤ人道藝ヲ嗜シ。互ニ友愛ニ  
篤シ。昔者商賈貿易。官府限制。今ヤ其ノ自然ニ信  
セ。百物亨通。昔者工事盛ニナラズ。貨財生セズ。今  
ヤ物料輸入。製造輸出。昔者房屋庫小。規則備ハラ  
ズ。今ヤ華堂雲ニ入り。工巧ヲ究極ス。昔者器皿麤  
澁。資生缺ルアリ。今ヤ供具精美。身心快適。昔者盤  
饌烹調。唯上物ヲ供ス。今ヤ唐茶白糖。朝涵夕濡。昔

者山海遼濶。跋涉艱難。今ヤ火車瀛舩。安坐遠ニ行  
ク。昔者天涯地角。夢魂達シ難シ。今ヤ電報急ヲ告  
グ。千里面談。昔者街夜黑。雀符竊發。今ヤ街燈晝ノ  
如ク。轂擊肩摩。昔者鴈魚便ナラズ。急難聲ヲ吞ム。  
今ヤ一粟一錢。四境ニ達ス。昔者貧氓傭工。金ヲ得  
輒チ使フ。今ヤ銀鋪收管。子ヲ加ヘテ償還ス。昔者  
簡冊奇珍。富人聚メ難シ。今ヤ書籍充溢。寒士致シ  
易シ。昔者朝秘景多ク。野ニ鬱衰アリ。今ヤ廟論巷  
議。日ニ萬紙ヲ印ス。蓋シ今ニ溯ル。五十年ノ前。之  
ヲ二百年ノ前ニ比セバ。則翅昏明晝夜ノ別ノこ



嗚呼用井得  
盡ク善蓋  
此翁慣手法

德盛ト雖凡  
云々此句輕  
重斟酌アリ  
漢學先生ノ  
知ラサル所  
シテ即廷荷  
短詞ヲ蒙  
ル所以ナリ

兩意即一篇  
ノ主意

ナラズ。今日ノ西國之ヲ五十年ノ前ニ比スレバ  
則又高下霄壤ノ異アリ。嗚呼此ノ如キ福運何ニ  
由テ致セシヤ。教化日ニ明。而シテ人心善ニ嚮フ  
ノ效ニ非ル無キヲ得ニヤ。然ト雖凡水火ノ理ヲ  
究メ、機器ヲ創造スル者アルニ非カレバ、則德正  
ト雖凡。而シテ用利ナラズ。生學カテ。此ヲ思ハ  
則機器ヲ創造スル者ハ功德見心。歲次上章敷牂。  
孟夏下浣。中村正直無所争齋ニ題ス

自助論第四編序 原漢文中 村正直

真正ハ學士ハ賤業ヲ為スヲ恥カレ之ヲ恥ル者

以下其証ヲ  
舉グ

ハ真正ノ學士ニ非ズ。真正ノ文人ハ俗務ヲ為ス  
ヲ嫌ハズ。之ヲ嫌ハ者ハ真正ノ文人ニ非ズ。昔者  
趙岐餅ヲ北海市中ニ賣ル。沈麟士簾ヲ織リ。書ヲ  
讀ミ。手口輟マズ。天下後世當之ヲ賤ニシザルノ  
ミナラズ。而反テ更ニ之ヲ重ニズ。程明道鎮南判  
官ニ僉書タリ。莞庫ノ細務。心ヲ盡サバ。ルナレ。屢  
重獄ヲ平反ス。蘇子瞻鳳翔府判官ニ僉書タリ。其  
文人ヲ意フテ吏事ヲ以テ之ヲ責メズ。子瞻心ヲ  
其職ニ盡ス。老吏畏伏ス。二公ノ賢長ニ於テ茲見  
ル。今ノ書ヲ讀ム者。或ハ賤業ヲ以テ生ヲ治ルヲ

二公ノ賢ニ  
上ヲ救フ今  
書ヲ讀ム云々  
下ヲ起ス是

今體名家文抄卷五



一段中ノ收束  
及ヒ過度處

且云々轉  
愈實際事  
ニ迫ルト人  
ノ妍醜ニ照出  
ス妙

上説ク所ノ  
諸人物ニ對  
シテ此編載  
ス所人物ヲ  
舉前後照應  
入題收束痕  
跡ナシ

耽ヲ。又俗務ヲ為スヲ屑トセス。已ヲ得ザルニ及  
ンテ。履ヲ賣リ繪ヲ販リ。或ハ腰ヲ五斗ニ折レバ。  
則一切書ヲ束テ觀ズ。曰我レ暇ナシ。嗚呼人志無  
キヲ病マ耳。暇無キヲ病マザルカ。試ニ思ヘ子  
瞻鳳翔ニ在リ。何等ノ繁劇。而シテ是ノ時作ル所  
ノ鳳翔ハ觀詩ノ如キ。鍛鍊敲推亦何ゾ其綽々餘  
暇アルヤ。且學問ノ功。循序漸進。久ヲ經テ輟マザ  
ルヲ貴ブ。故ニ一日必ク多時ヲ要セザルナリ。嘗  
テ一官アリ。某先生ニ謂テ曰。予職務鞅掌。讀書暇  
少ナキヲ患フ。先生對テ曰。君書ヲ讀ム馬ヲ走セ

燈ヲ看ル如ク。毎日六時中。一意從事。積テ十年  
ニ至ルト雖也。業ヲ成ス能ハザルナリ。其々佛然  
先生曰ク君毎日只書ヲ讀ム二三枚。深思牢記ヲ  
要ス。十年ノ後。必ク博識衆ニ超シ。旨ナル哉言ヤ。  
茲編載ス所。聽留斯格的ノ如キ。ハ理學ノ名家  
ト為リ。而シテ鞋ヲ造ルヲ以テ本業ト為シ。一ハ  
詩文ノ鉅匠為リ。而シテ畢生吏務ヲ廢セス。大ニ  
後人ノ志行ヲ砥礪スルニ足ル者アリ。予深ク讀  
者ノ反覆思ヲ致スヲ望ムナリ。庚午仲夏二十六  
日。中村正直無所爭齋ニ題ス。



此編前編  
先ツ其意見  
ヲ述々然後  
其証左ヲ舉  
グ趣向相同

自助論第八編序原漢文中 村 正 直

或曰夕泰西多ク剛毅ノ人ヲ出ス。蓋シ一ハ天氣  
互寒軀幹堅實ニ由リ。一ハ土地磽确勤勉ニ非カ  
レバ食ヲ得ザルニ由ル。余曰ク此事或ハ之アル  
容シ。然ニ此大本此區々ハ者ニ在ラザルナリ。曰  
何ソヤ。曰ク泰西人多ク剛毅ノ行アル所以ノ者  
剛毅ノ原質アルニ由ルナリ。曰何ヲ剛毅ノ原質  
ト謂フ。曰慈ナリ。信ナリ。襍未耶維廉七ノ事ヲ觀  
ズ。其道ヲ確信シ。人ヲ噉ス己ノ如ク。痛苦避ケ  
ズ。死生易ハス。翰回沙伯ノ事ヲ觀ズ。多ク嬰兒

鏡刻斬絶是  
古人柳文ヲ  
評スル語移  
シテ以テ此處  
ヲ評スシ

ノ命ヲ救ヒ。永ク黒奴ノ苦ヲ脱ス。千艱萬阻坐レ  
ズ折セズ。其志ヲ達シ。而シテ後已ム。蓋シ此教人  
ハ如キ。肝脾骨肉毛髮爪甲皆慈ト信ト。由テ成  
ル。故ニ此身苟モ存此心喪セズ。剛毅ナラザルカ  
欲スモ美ゾ得ベケニヤ。是ヲ以テ剛毅ナル者ハ  
心志ノ力ニシテ。而シテ慈ト信トハ其原ナルヲ  
見ル可キナリ。或曰世固ヨリ強忍カアル者アリ。  
亦剛毅ノ人ト謂フベキカ。曰非ナリ。李斯呂惠卿  
ノ如キ。豈是レ強忍カアル者ナラザランヤ。然レ  
其為ス所。慈信ノ心ニ根井ズ。嗜慾ノ私ニ出ス。故



一結斷鍊ノ如シ勁甚シ拔甚シ

第一第八及此序皆或ノ問ヲ借リ應接辨解文ヲ成ス者ニシテ局法置向文人急ム所ト雖モ初學法易キ所故ニ重多ヲ選ス

弊害極マル所身喪ヒ國敗ル宜尼云ハ不ヤ振ヤ慾焉ゾ剛ヲ得シ

自助論第九編自序 原漢文

中村 正直

或余ニ謂テ曰ク西國ノ事理大概此ノ書ニ盡ク余曰ク否々此レ一人一家ノ書ニ過ギガルノミ若レ此ヲ以テ其概畧ヲ盡スト為セバ則大ニ謬レリ且ツ余ガ之ヲ譯スルノ意ト甚タ相徑庭ス夫レ天下ノ事理日ニ出テ而シテ窮マラズ古人ハ是トスル所而シテ今人之ヲ非トスル者アリ

今人ハ是トスル所為ガ後人ノ非トスル所為ヲ知ルヲ知ラシム古人ノ言ハバハ亦ニハ今人之ヲ言フ者アリ今人ノ言ハバハ亦為ガ後人ハ之ヲ言フ者アラバハ亦知ラシム天下盡ク以テ非ト為シテ一人獨之ヲ是トシ當時一在テハ則縲紲ノ辱ヲ受ケ後世ニ在テハ則秦牛名ヲ得カ刺刺腐ハ如キ者アリ天下ノ同論豈必ス是ニシテ而シテ一人ノ異見豈必ス非ナラニヤ天下ハ未ダ言ハバハ亦ニシテ而シテ一人獨之ヲ言ヒ當時ニ在テハ則戮セラレテ罪人ト為



以上一解且  
云々一層

リ。後世ニ在テハ則尊ビラハテ聖人ト為ル。瑣格  
刺底ハ如キ者アリ。天下通行ハ説豈必ズ是ニシ  
テ。而シテ一人創始ハ論豈必ズ非ハ。ハニヤ。是故  
ニ。縦ヒ宇宙千百ハ意見議論ヲ舉凡。而シテ猶ホ  
未タ以テ天下ハ事理ヲ盡ス。足ハズ。况ヤ此ノ  
區々ノ免園冊。何ヲ以テ其萬一ヲ燒ハニ足ラニ  
ヤ。且ツ余ノ是ノ書ヲ譯スル所以ハ。人ヲシテ進  
テ西書ヲ習讀シ。其心ヲ謙虚ニシ。新見異説ヲ容  
受シ。務テ衆人ノ知識ヲ集ム。而シテ妄リニ一己  
ヲ執テ以テ論斷セガラ使メント欲スルナリ。乃

第二問

ヲ然ラズシテ此ノ辯ヲ隔テ痒ヲ搔ク人。譯書ヲ  
讀ミ。遽ニ以テ其概略ヲ盡スト為ルハ。豈予カ本  
心ナラニヤ。或又曰是ノ書説ク所。孔子ノ昔ニ合  
ナフ。故ニ取ル可シ。余曰ク然ラハ則子豈孔子ノ  
言ハサル所ハ。則概シテ取ルニ足ラズト謂ヘル  
カ。此レ孔子ノ意ト悖レリ。子四ヲ絶ツ意母ク必  
母ク固母ク我母シト又。憤ヲ發シ食ヲ忘レ樂ヲ  
以テ憂ヲ忘レ老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラズ  
ト曰ハズヤ。孔子ヲシテ今日ニ生レ使メバ。則其  
務テ新見異説ヲ聽納スル者。果テ何如ゾヤ。若シ



以上一解夫  
レ云々層

孔子ノ書ヲ死讀シ。留滯シテ化セズ。此ヲ以テ天  
下ノ事理ヲ規シ。一言合ハザレバ。駭テ以テ怪ト  
為ス。此ノ如クナレバ。則學ヲ好ミ及バザル如キ  
ノ意。後人竟ニ善ク之ヲ學ブ者ナク。而シテ先聖  
在天ノ靈何ニ由テ安慰セハヤ。夫レ學問ノ事。衆  
異ヲ集テ以テ思察ニ備ヘ。舊見ヲ濯テ以テ新得  
ヲ冀ヲ貴ブ。譬ヘハ大餐ヲ食ガ如シ。郇厨侯鯖五  
味ハ珍衆異并セ備ハリ。然ル後口ニ可ナリ。然ラ  
ズシテ食前方丈陳スル所唯一種ノ物ナラバ。則  
其人同ヤ。豈厭フ可カラズヤ。眼鏡ノ紅色ナル者

總收入題義  
論意出テ愈  
妙波瀾伏起  
抑登マ可カラ

ヲ掛クテ物ヲ觀レバ。森羅萬象紅ノラザル者ナ  
シ。碧色ノ者ヲ掛ケレバ。則乾坤一碧黄色ノ者ヲ  
掛レバ。則宇宙皆黃ナリ。若シ先ツ己ノ見ヲ執  
テ以テ他人ノ論ヲ聽カバ。則其所謂同モ亦其ノ  
真ニ非ルナリ。舜好テ。適言ヲ察シ。己ヲ舍テ人ニ  
從フ。孔子禮ヲ老聃ニ問ヒ。樂ヲ萇弘ニ問フ。聖人  
ノ學ヲ好ミ汲々トシテ倦ズ。虛ニシテ以テ人ニ  
受ル者此ノ如シ。豈後人ハ先入主ト為リ好ムテ  
異同ヲ立テ。而シテ妄ニ相是非スル若クナラン  
ヤ。是ノ書ノ如キ。子持宜シク收テ萬卷中ノ一部

論禮記家文抄卷五



ナルヲリ

ト為ス可クシテ可ナク此ヲ以テ自ラ足ルリト  
スルハ不可ナク此ヲ以テ自是トスルハ大ニ不  
可ナク或ハ此ヲ以テ他人ノ議論ヲ律セバ更ニ  
大ニ不可ナク天下ノ事理浩トシテ巨海ノ如シ  
豈升斗ノ量ヲ以テ之ヲ概スルヲ得ニヤ適第九  
編刻成書以為序

自由之理序 原漢文 中村正直

翻案抄皆  
是文人秘訣  
西村先生史  
編序在也  
學ヲ以テ此  
者乃自由之理

凡ノ事限界ハカク可カテズ唯愛限量アル可カ  
ス此意ハ西賢倍根之ヲ二百禩ハ前ニ言テ而  
シテ今宇内文明諸邦ノ婦人亦能ク之ヲ口ニス

ヲ序ス重經  
ノ孰以テ人  
只其妙ヲ知ル  
而シテ其意匠  
ノヲ海ヲ看出  
スル能ハス今余  
之ヲ指示シ良  
工獨リ苦心ニ  
メス

此書政府ノ權當ニ限界アルベキヲ論ズ此明日  
詳備故ニ余別ニ當ニ限量ナルベキ者ヲ舉テ  
之ヲ言ハシ夫レ愛限量アル可カラズ上帝ノ  
愛スル限量アルナシ故ニ人亦當ニ上帝ヲ愛  
人ヲ愛スル限量ナルベシ上帝ヲ愛スル事姑  
ク置テ論ゼズ請フ人ヲ愛スル一端ヲ言ハシ吾  
ノ靈魂五官四肢ト明ニ神ノ妙造ニ係リ永遠無  
疆ノ洪賜タリ審ニ此ヲ思ヘバ則自ラ愛スルノ  
心油然而シテ生ズ君親朋友一國ノ人皆神ノ造  
ル所タル吾ト同シ審ニ此ヲ思ヘバ則親愛ノ心

上帝ヲ愛スル  
姑之ヲ置テ云  
是ヲ擲脱法  
ト云



文勢滔々瀉  
 千里趣然  
 其勢改其  
 瀾面之白愛  
 一人之必至  
 領之揚之辨難  
 應之疑律端  
 正猶不其卒  
 坐作進退法  
 了之混七則  
 アリテ亂レテ  
 トニ文壇若將  
 ト稱スヘシ

淳然トシテ生ズ。蠻夷ノ民容易ニ自殺ス。故ニ容  
 易ニ人ヲ殺ス。開化ノ民真正ニ自ラ愛ス。故ニ亦  
 真正ニ人ヲ愛ス。自ラ愛スルハ心人ヲ愛スルハ  
 心ト。獨リ並ヒ行ハレテ悖ラザルノミナラズ。實  
 ニ相須ツテ以テ生長ス。何ヲ自ラ愛スト。謂フ。曰  
 正心誠意、靈魂ノ真ヲ全ウシ。克己復禮、肉體ノ欲  
 ヲ存ゾク是ナリ。何ヲ人ヲ愛スト。謂フ。曰。人ヲ愛  
 スル己ハ如ク。貧者ニ施シ。病者ヲ救ヒ。貴賤ヲ凌  
 ガズ。多寡ヲ暴セズ。強弱ヲ犯サズ。大。小ヲ侮ドラ  
 ズ。寛弘ニシテ猜忌ナラズ。公平ニシテ偏頗ナラ

而シテ八則半  
 句法變化、處  
 注意スシ容  
 易ノ讀過ニ  
 カラス

ズ。眞實ニシテ詐偽ナラズ。謙讓ニシテ驕矜ナラ  
 ズ。温厚ニシテ暴慢ナラズ。相交ルニ衷ヲ以シテ。  
 相ヒ隱藏セズ。相下ルニ禮ヲ以シテ。相侵侮セズ。  
 愚人ヲ憐ニ而シテ之ヲ誘迪シ。罪人ヲ哀ニ而シ  
 テ之ヲ教悔ス。同儕ヲ愛スレバ。則相推スニ赤心  
 ヲ以テシ。己ニ敵スル者ヲ憫メバ。則善ヲ施ヲ以  
 テ之ヲ化ス。心口合一、内外間ナク。彼我ヲ存セズ。  
 自他ヲ別セズ。苦心圖謀スル者。盡是邦國公同ノ  
 益。勞力經營スル者。民人共享ノ利ニ外ナラズ。凡  
 ソ此等人ヲ愛スルノ事ヲ為ス。唯心カハ至ラザル



東方曼精校  
寫生動文甚  
拘囑意甚曠

患之尚ホ何ゾ限量ハ議ス可キアラシヤ。竊ニ嘆  
ス。東洋諸邦ノ人民進々。神ヲ知ラズ。唯務テ人ト  
角ス。故ニ人ヲ愛スルノ心。毎ニ廣カラズ。深カラ  
ザルヲ病人。木氣高クハハ則ニ世ヲ睥睨シ。功名  
成レバ。則チ千古ヲ陵蹙シ。權威得レバ。則チ寡弱ヲ侵  
暴シ。意見立テバ。則チ好シ異ヲ惡ム。士大夫或  
ハ私智自ヲ用ル。而シテ謙虛以テ人ニ下ラズ。工  
藝ハ人同業相忌ム。而シテ降挹以テ益ヲ求ム。商  
賈各相傾軋シ。而シテ合同以テ利ヲ要ム。俗  
習風ヲ成シ。日タル久シ。吾邦人民道ヲ日駁々ト

全篇收拾一句  
張嘆

シテ。學ニ向フ。昏夢ノ頓ニ覺ムルガ如シ。他日智  
識深奥ニ進ミ。而シテ人ヲ愛スルノ心。限量アル  
ナク。情親ク。而シテ力合ヒ。力合ヒ。而シテ事成ル  
神人交和福祿昌盛。其レ庶幾ス可キノコ。

民選議院論綱序 原漢文中 村正直

民選議院ノ説起ルヨリ。是非未タ決セズ。論議紛  
然。或問テ曰。子以テ何如ト為ス。余曰。天下ノ事。日  
睹ス可ラザル者。是ニ似タレバ。則チ行フ可シ。今民  
選議院ヲ設ル。是ニ似タリ。是ニ似タリ。故ニ行フ。  
可キ也。何ヲ以テ之ヲ設ル。是ニ似タリト謂フ。曰

主意



今日ノ政堂名ケテ君主專制ト曰フ。而シテ實ハ  
則有司事ヲ決スルナリ。其有司ノ爵祿ハ。則陪鑿  
率旗ノ賞典ナリ。此レ一時已ヲ得ザルノ計ニ出  
ルト雖也。而シテ今日ニ至ル。已ニ其弊端ヲ見ル。  
故ニ此弊ヲ救ハント欲セバ。別ニ一法ヲ求メガ  
ルベカラズ。則未ダ民選議院ヲ設ルヨリ踰ル者  
アラズ。或ハ其尚早クシテ恐クハ弊害ヲ生スル  
ヲ慮レバ。則余之ニ對テ曰ハシ。凡事未ダ全利ニ  
シテ。弊ナキ者アラズ。弊多クシテ利少ナケレバ。  
則去テ之ヲ除キ。利多クシテ弊少ナケレバ。則就

テ之ニ從ハシ。此ノ如キノ今有司事ヲ決スル  
ノ弊。已ニ其端ヲ現ス。沿襲已マザレバ。則弊將ニ  
日ニ多カラントス。而シテ利將ニ日ニ少ナカラ  
ントス。民選議院ノ利。已ニ其兆ヲ發ス。設立試験  
則利將ニ漸ク多カラントス。而シテ弊將ニ漸ク  
少ナカラントス。故ニ曰之ヲ設ル是ニ似タリ。若  
シ設立ノ後弊害生スルアル如キハ。則其時ニ當  
テ之ヲ改ムル耳。人世者活物ナリ。事理者形ナキ  
ナリ。唯活故ニ時ニ隨テ變易シテ已マズ。唯形ナ  
シ。故ニ是ニ似タル者ヲ見レバ。則斷ジテ之ヲ行

回顧一末

禮記卷之八



ナハシ。若シ確然一定ノ是。算數ノ如キ者ヲ求メ。而シテ後之ヲ行ハズ。則是レ天下ノ事。斷シテ行フベキ者ナシ。今夫レ良賈ノ貨物ヲ運載シ。重洋ヲ越エ。險危ヲ冒シ。互市ヲ行フ。其之ニ似タルヲ見。而シテ之ヲ利ニ求ム。若シ其或ハ損害アルヲ慮ルゴトキハ。則唯戸ヲ闔シ。足ヲ畏ミ。而シテ出ザルアルノ之。猛將ノ三軍ヲ率テ強敵ト戦フ。亦其是ニ似タルヲ見。而シテ勝ヲ敵ニ制スルニ過ギズ。若シ万一人敗ヲ慮ルゴトキハ。則兵ヲ休ル上タルニ若ク莫シ。民選議院亦然リ。苟モ其是

一正一論筆至  
ヲ并今ノ意達  
セザルナリ

ニ似タルヲ見レバ。則設テ之ヲ行ヒ。以テ有司事ヲ決スルノ權ヲ殺キ。以テ人民政ニ與カルノ精神ヲ養フ。盖シ今日ニ在リ當ニ務ムベキハ。急カク。而シテ一日廢スベカラザル者ナリ。何ゾ其弊害ヲ慮ルニ暇アラシヤ。昔美國合邦ノ始テ建ヤ。仁人君子。相議條約十三則ヲ立。之ヲ行フニ及ンテ弊害頗ル出。是ニ於テ屢會議ヲ徵シ。斟酌改正。數年ノ後。遂ニ政体堅定。福祥安寧ノ邦タルヲ致ス。盖シ弊害ナル者。逆ノ觀ルベカラザルナリ。始十三則ヲ立ルノ時。其是ニ似タル者ヲ見。而シテ

此一段老成沈  
著ノ言ヲケレハ  
則此篇書生  
才手ノ文ニ過  
ズ



水滸把ノ形  
勢時情ヲ説  
ク蘇家亞流  
ト云ヘシ

之ヲ定ムルニ過ギズ。之ヲ行フニ至リテ其弊害  
ヲ知り。因テ改正釐革。以テ美ヲ盡シ。善ヲ盡シ。遠  
ク唐虞ニ踰ルヲ致ス。豈一朝一夕ノ能ク成就ス  
ル所ナランヤ。今日ニ在テ。民選議院ヲ設立スル  
ハ。猶ホ始テ山中ノ泉源ヲモトメ開ラキ。而シテ  
之ヲ導クガゴトシ。或ハ其下ニ隨ヒ。而シテ之ヲ  
決シ。或ハ其勢ニ就キ而シテ之ヲ通ジ。噴者之ヲ  
削シ。平ナラシム。梗者之ヲ除シ。行カシム。始ニシ  
テ。涓流ハ小川ナリ。次ニシテ奔逸狂怒ハ大河ナ  
リ。終ニシテ渺茫無涯ハ長江ナリ。時ハ小。而シテ

正論渾融

隄防ヲ決シ。田廬ヲ壞ス。其害亦免ハザル。然ニ  
常時ニ在テ。灌溉ノ利。萬姓資生。舟楫ノ便。財貨由  
テ通ズ。是レ其利百世ノ久シキニ及ビ。而シテ一  
時ノ害。蓋シ言フニ足ラザル者アリ。苟モ開キ。而  
シテ導カザレバ。則泉源ニ逢フト雖也。焉ハ能ハ  
其長江大江ヲ成スヲ望マシヤ。是ニ似タル事ヲ  
見。開導ノ端ヲ造ス者。今日ノ人民ノ任ナリ。美善ノ  
法ヲ成シ。福利ノ果ヲ收ムル者。吾輩子孫。冀クハ  
其レ之ヲ企望センカ。山田君對灣。民選議院諸論  
ヲ採リ。彙テ一編ト為シ。刻シテ世ニ行ス。余ニ叙



八題乃結束

ヲ索ム。余是ノ舉ノ世ニ益アルヲ嘉シ。欣然トシテ題スルニ是ノ言ヲ以ス。乙亥暮春日。江都敬守中邨正直叙

古今萬國綱鑑錄序原漢文

中村正直

古今萬國綱鑑錄刻成ル。無所爭子之ガ序ヲ為シテ曰。嗚呼。人類ハ自ラ天良ニ違ヒ。罪戾ニ陷ルヲ致ス者何ソ。其レ誰昔ヨリシテ然ルヤ。亦何ソ。其レ萬國一轍ニ出ルガ如キヤ。漢土ノ史ニ據ルニ。必儀始テ都ヲ作り。帝位ヲ踐ム。之ニ繼ク者ハ炎

咏嘆起法筆  
底涙アリ

小東

帝為リ。炎帝ノ世。夙沙氏叛ク。黃帝興ルニ追シテ。炎帝ト阪泉ニ戰フ。蚩尤ヲ涿鹿ニ誅ス。唐堯ノ世。號シテ至治ト稱ス。乃チ渾敦窮奇。檮杌饕餮四凶ノ族アリ。能ク人害ヲ為ス。舜四門ニ賓タルニ及ンテ。諸ヲ四裔ニ投ジ。又其エヲ流シ。驩兜ヲ放チ。鯀ヲ殛シ。三苗ヲ殺ス。何ゾ其レ化ヲ梗ク者ノ多キヤ。蓋シ。卷ヲ開ケバ。則戰鬪殺戮ノ史ナリ。降テ後代ニ至リ。人ヲ殺ス。飴ノ如キ者。奸賊鬼蜮ノ如キ者。淫虐荒亂ナル者。歷々卷冊ニ相望ム。我邦ノ史ヲ觀ルニ。神武天皇ノ朝。長髓彦アリ。王師ヲ梗

禮名家文抄卷五

十七



塞シ。而シテ殺サル。土蜘蛛アリ。勇カヲ恃ニ。来リ  
 降ラズ。而シテ掩殺セラレ。綏靖天皇朝ニ。手研  
 耳命ニ弟ヲ害センヲ圖ル。而シテ射殺サル。崇神  
 天皇ヨリ景行天皇臨御ニ至リ謀叛シテ誅伐セ  
 ラル者。弒殖安彦アリ。狹穗彦アリ。王化ヲ梗スル  
 者。熊襲アリ。東夷アリ。神功皇后ニ至ルニ迫シテ。  
 諸賊ヲ誅滅シ。遂ニ海ニ航シテ新羅ヲ征ス。蓋シ  
 卷ヲ開ケバ。則戦闘殺戮ノ史ナリ。時ヨリ厥後兄  
 弟位ヲ争ヒ。臣僕主ニ抗シ。官闈政ヲ亂リ。侯伯雄  
 霸ヲ争ヒ。刑賞亂ル。善惡淆ル。人民塗炭ノ苦ヲ受

ケ。而シテ始テ肩ヲ徳川氏ノ禍亂ニ戡テ太平ヲ  
 致スニ憩フ。猶太ノ古史ヲ攷ルニ。神亞當夏娃ヲ  
 造ル。亞當二子アリ。長ヲ該隱次ヲ亞伯ト曰フ。該  
 隱其弟ヲ怒リ。攻テ之ヲ殺ス。厥後世人惡ヲ作ス。  
 貫盈心ノ圖維スル所。恆ニ惡心念ヲ懷ク。神洪水  
 ヲシテ地ニ汎濫セシメ。億兆ヲ剪滅シ。而シテ獨  
 リ挪亞ノ一族ヲ救ス。然ニ人民仍ホ天良ニ遵ハ  
 ズ。自ラ罪過ヲ蹈ム。希臘羅馬以下ノ史ヲ觀レバ。  
 戦闘殺戮ノ事ヲ除ケバ。其記ス可キ者蓋シ鮮シ。  
 噫。東方ノ古史ヲ觀ルニ。既ニ彼ガ如キ。諸ヲ西國



今昔名家抄卷五

ノ舊紀ニ參スルニ又此ノ如クナレバ則信ナル  
カナ人類ノ自ラ罪業ヲ作シ多ク不良ヲ行フ者  
萬國軌轍ヲ合スルカ如ク地球人民ノ同シク一  
祖ニ出ル者而シテ徴アリ抑人ナル者ハ神ノ造  
ル所タリ而シテ人ハ則自ラ本善ヲ失ヒ愈久ク  
愈迷フ来リ救フ者アルニ非ルヨリハ其爲ゾ能  
ク義罰ヲ免ルヲ得ンヤ世ニ善人君子ナカラザ  
ルアラズ然レ氏濁惡ノ世ニ在リテ小善顯レ易  
シ之ヲ要スルニ明神昭鑒ノ下志行完善毫髮議  
ス可キ者ナキ者古今實ニ是人アルトシ悔改

抑一段作者  
本意ヲ開  
ク

本意説一然  
後入題

而シテ上主ニ仰賴スルニ非ザルヨリハ其レ爲  
ゾ能ク罪過ヲ贖ヒ而シテ公義ト稱セラレ以テ  
生命ノ道ニ進ムヲ得ンヤ原ニ夫ノ三千年前歐  
羅巴榛々狂々夷狄ノ俗ナリ教道漸ク行ハル  
ニ迨テ人民駸々トシテ化ニ向ヒ學問日ニ盛ニ  
理學益精ク器藝益巧ニ以テ今日ノ歐羅巴諸國  
豐阜殷盛福祥薦リ臻ヲ致ス教道ハ治化ニ裨ケ  
アル此ハ如キアルカナ試ニ此書ヲ讀ミ而シテ  
古今萬國既往ノ事ヲ察スレバ則古昔人民多ク  
不良ヲ行ヒ殺戮ヲ好ム教道日ニ盛ナルニ及ビ

今昔名家抄卷五



而シテ人民學問ニ進ミ、器藝ニ精ク、本末叙アリ、  
先後倫アリ、得テ紊ルベカラザルヲ知ルナリ、但  
此ノ書往古ニ詳ニシテ近今ヲ畧ス、人苟モ西國  
輓近ノ史ヲ察スレバ、則當ニ、間戰鬪殺戮ノ事ア  
ルヲ免レズト雖氏、而シテ之ヲ要スルニ學問器  
藝日ニ進ミ、日ニ新ニ青年業ヲ勉メ、白首道ヲ樂  
シ、風俗粹美比屋封不可シ、中ニ就テ英德ニ國老  
人壽命年ヲ逐ヒ長ヲ加フ、教道ノ人心ヲ安慰シ、  
憂愁ヲ祛キ、快樂ヲ予フルノ功效ニ由ルニ非ル  
ナキヲ知ルベキナリ、是ニ由テ之ヲ觀レバ、則年。

首尾照應亦  
咏嘆法ヲ用  
ユ

代ヲ經ルノ後、人類ノ天良復シ、而罪孽除キ、萬國  
均ク福祥ノ域ニ臻ル者、其レ庶幾ス可キカ、明治  
七年夏五月敬宇中村正直題

農業三事叙原漢文 中村正直

農學ノ字即  
是一篇命根  
用意淺カラズ

吾友津田君、仙農學ヲ嗜ム、飢渴ノ飲食ニ於ルカ、如  
シ、毎ニ談シテ稼穡樹藝ニ及ハバ、鬚眉輒チ張ル、聲  
音頓ニ高ク、口津カ、沫ヲ吐ク、余カ園中樹木多シ、君  
屢其間ニ徘徊ス、嘗テ杖ヲ持シ、一松ヲ指テ曰ク、此  
枝北ニ向フ者、下リ傾ク百十二度、五十分、故ニ南ニ向  
フノ枝、滋養ヲ受ケ而シテ肥大此ノ如シ、大抵松杉

叙事叙言  
正法アリ、今  
思亂レテ作  
文ノ規矩準  
繩トナマシ



ノ類、其枝平正ニシテ稍傾下ス、故ニ幹、滋養ヲ受ケ  
而シテ直上長大ヲ致スナリ、君又梅花將ニ綻ント  
シテ其細枝ノ直上スル者、芽ヲ發スル甚タ少ヲ觀  
梭繩ヲ以テ之ヲ縛シ、之ヲシテ偃曲、而シテ傾下ナ  
ラ令メ曰ク此ノ如クスル者、枝ヲシテ生カヲ減セ  
使メ幹ヲシテ長大ナラ使メ、新芽ヲシテ殖生セ使  
メ、花實ヲシテ穰盛ナラ使ムル所以ナリ、後數旬、果  
テ枝ノ繩束ヲ受ケ、而シテ傾下スル者、粟々トシテ  
萌芽ヲ出スヲ見ル、又嘗テ庭前ノ櫻樹ヲ顧ミ、一大  
枝ヲ縛メ下ラシメ、而シテ其對向スル所ノ一小枝

ヲ舎ク、曰今日ヨリ此ノ大枝復タ大ヲ加ヘ、而シ  
テ當ニ多ク花葉ヲ生ス、ト、此ノ小枝ハ則枝日ニ  
長大、而シテ花葉ハ必ス多ラサリナリ、且ツ僮ノ呼  
ヒ、其ノ大小長短ヲ量ラシメ、而シテ之ヲ記シ、以テ  
他日ノ比較ニ備フ、諺ニ曰血ニ交ル者赤シト、余カ  
君ト交ヲ締ヒシヨリ、余亦自ラ植物ノ趣味大ニ曩  
日ニ倍スルヲ覺エ、日ニ小僮老僕ト紅紫青緑ノ間  
ニ往來シ、手ニ繩索ヲ把リ、樹枝ニ縛シ垂下セシメ、  
其偃曲ノ度、種々同シカラス、以テ其生長ノ異ヲ驗  
セシト欲ス、池ヲ環テ躑躅多シ、一日、余其枝ヲ縛シ



悉ク偃下也。ハ適君至ル時梅花爛漫香氣園林ニ  
満ク。君蜂蜜ヲ買ハシメ之ヲ花ニ塗リ。雌雄蓋合使  
メ。曰ク此ノ如クスル者ハ其ヲシテ多ク子ヲ結ハ  
使メント欲スルナリト余舌ヲ掉ヒ驚嘆ス。昔道人  
段七マハリ時節ヲ論セ不花ヲシテ開カ遣ハ。君乃  
チ多ク花ヲ著ケ子ヲ結ハシハ。其實益ヲ世ニ為ス  
豈啻段七マハ比ハ如キハ云ハレハヤ。今正ニ四月  
末。躑躅花盛ニ開キ。麗景艷光。去年ニ倍蓰ス。余ノ  
樹枝ヲ偃曲スルノ勞。是ニ至テ始テ償フ。余人ニ遇  
ヒ。詔々是ヲ以テ自ラ誇リ。而シテ其實君ヨリ得ル

西ノ字輕

慷慨憂國ノ  
話則言語ニ非  
ル

ナリ。君又言フ。此ノ偃曲ノ法ヲ以テ之ヲ桑茶ニ施  
セハ。則新芽新葉ノ發生スル者。止三倍ノ多クナ  
試ニ此ノ法ヲ用ウル者ヲ以テ。此法ヲ用井サレ者  
ニ比スレハ。樹ノ生長。三年ト一年トノ差ヒ。今  
我邦他國ト互市。而シテ繭絲茶葉産物ノ魁首タル  
若シ此法歴ク邦内ニ施セハ。則其ノ國ヲ富スル一  
助タル亦多カラズヤ。去年澳太利國博物會アリ。君  
使節ニ陪メ至リ。既聞屢見進益スル所多シ。荷蘭人  
荷衣白連ナル者農學ノ大家ナリ。君荷氏ト一見手  
ヲ握リ知已ト為ル。荷氏君ニ語ルニ生平經驗スル



予々叙來已一篇ノ序大ナシ人ノ之ヲ覺ヘス乃風發キ所以

九鼎大呂太ヲ過矣非ヤ

所ヲ以テス、翅囊ヲ傾ケ困ヲ倒シテ之ヲ出スノ之  
ナラス、既ニ歸レハ、則農業三事ヲ著ハシ、諸ヲ世ニ  
問フ、其文辭真確明詳、讀者輒予之ヲ實見ニ施行ス  
ヘシ、近來書籍版ニ録スル者、日月増加ス、然ニ此書  
ノ肺腑ヲリ出テ實益ヲ世ニ為ス、如キ者甚々少ナ  
シ、余此書ヲ重ニスル、嘗九鼎大呂ノ如キノ之ナラ  
ス、故ニ序言ノ請取テ辭ヒサル也、語ニ曰ク、君子ハ  
人ノ美ヲ成スト、余何ゾ敢テ妄ニ君子ヲ以テ自ラ  
擬ヒシ、但深ク君ノ遠遊、靈シカラス、細載シテ歸リ  
大有益ノ事ヲ我邦ニ傳フルヲ嘉ニスルヲ以テ、君

一結餘音暢  
暢此語ニ非ヤ  
ト此篇ヲアル  
能ハス

ノ美ヲ成リ、ラニト欲ス、ヒ鳥ノ得、  
治七年、四月二十四日、敬宇中村、正直躑躅花開處  
ニ題ス。

泰西史鑑序 原漢文 依田百川

突然空ニ駕  
シテ起ルオ  
思九ナラス

江湖ニ遊ハ者ハ、輕舟短棹、容與優游、以テ、  
波ハ縹渺群巒ハ環繞ヲ眺ス、可シ、若シ夫ハ巨海  
ヲ超、大洋ヲ涉ル、驚濤駭浪、一颿萬里ハ、  
輪艤、千尺ハ、檣百尋ハ、楫ニ非レハ、安ハ能ク長  
風ニ駕シ、不測ハ、險ヲ試シヤ、嗚呼、獨リ、江海ニ於  
ルハ、ニナラサルナリ、讀書ヒ亦然リ、一方ノ書ヲ

過渡



骨名家文抄卷五

讀之。一國ノ史ヲ閱スル。典章文物、儀制法度ト夫  
ノ治亂興廢ノ跡必シモカヲ費サス。一ヲ舉テ百  
ヲ槩ス。固ヨリ尋繹シテ知ル可キナリ。海外諸國  
ニ至リテハ、則國トシテ俗ヲ殊ニセサル莫シ。地  
トシテ治ヲ異ニセサル莫シ。彼以テ利ト為シ而  
シテ此レ以テ害ト為ス者アリ。能ク此ニ行ハレ  
而シテ決シテ彼ニ行ハル可カラサル者アリ。統  
緒百端、變幻側セラレス加之ナラス。智巧日ニ新  
人心日ニ狡。其成敗治亂富強ノ法、政刑ノ術、常理  
ヲ以テ推シ難キ者アリ。腐儒陋生、乃チ偏見陋識

喻ヨリ正ニ  
ハリ正ヨリ  
命ハル行  
文法アリ  
筆ヲ逆透  
入題

ヲ以テ之ヲ臆測セシト欲ス。譬ハ猶小敗舟一  
駕。敵楫ヲ鼓シ萬里ノ蒼溟ヲ破ルコトシ。鯨濤  
山立。一瞬覆没。幾何ソ其レ魚鱉ノ笑ハ所トナラ  
カランヤ。本藩大參事西村君重器、普魯期人著ス  
所ノ泰西史鑑若干ヲ譯ス。卷成ル余ニ微ニ之ヲ  
序セシム。夫地球ヲ圍ヒ。國々ル者萬區。古跡ニテ  
禽獸榛莽ノ土ト為ス者。今ハ則烟火萬里。文運大  
開。其治教風俗以テ範ヲ百世ニ垂レ。則テ四方ニ  
揭ク可キ者亦多シ。苟モ當世ニ志ス者。其得失利  
害ノ事ヲ詳察セサル可カラズ。則有識者ノ最モ

豊名家文抄卷五



迎來然後ノ  
如ニ故ニ結  
亦陡然此ノ  
如クナラサ  
ルヘカラス

此編前編ト  
起手及過渡  
接續ノ法  
般相似タリ  
以テ文章法  
アリ文入才

子ノ文字尙  
モセリルヲ  
見ルヘシ  
天地一大戲  
場是レ清康  
熙帝語人皆  
之ヲ知ル然  
ニ其實揚用  
修ノ語帝棄  
テ之ヲ裝飾  
スルナリ

注意ス可キ所ナリ。嗚呼四海ノ外。洪波杳渺百怪  
幻忽。鬼魅跳梁。苟且深沈大畧ナリ。變ニ臨テ少モ  
動カサル者。一非ハハ。豈ニ能ク其利害ヲ審シ。其  
得失ヲ察スル。ヲ得シヤ。外國ノ史ヲ讀ム者當ニ  
是ノ如ク觀スヘシ。明治己巳十二月佐倉権大參  
事依田朝宗識

近世史略序 原漢文 川田剛

裙履細叙ヨリ。以テ髻鬢肩佩ハ細ニ述ル。六率  
不皆様ヲ梨園ニ依ル。名優ハ登場旬日ヲ出テス  
ニハハ。百ハ街婦々裝飾頓ニ舊觀ヲ改ム。是ハ都

俗好尚ノ屢變ナル所以ナリ。而ハ余則謂フ今ハ  
時務ヲ論ズル者。頗ル類スルナリ。蓋邦國ナル者  
一大戲場ニシテ。林々總々。億兆人民。皆觀客為レ  
バ。則當路勲賢。夫ノ才學智術。奇偉非常ノ士ト。即  
俳優工技者ナリ。故ニ此輩為ス所。衆人注目。以テ  
標準ト為ス。初花旗船始テ至ル。霸府其請ヲ許シ  
而シテ一二雋傑首トシテ尊攘ヲ唱テ曰ク。霸府  
ヲ廢セザレバ。則王威尊トカラズ。夷狄ヲ攘ハガ  
レバ。則國勢振ハズ。此ノ說一出。海内翕然。所謂慷慨  
家者。燕尾衫ヲ被リ。白馬袴ヲ著ケ。大髻長刀。張



東各九一ノ  
寫真此妙手  
模尽生色ア  
ルニ如カス

乃此ノ如シ  
句括括カ  
アリ故ニ枚

臂横行。洋書ヲ讀ム者ト。和議ヲ持スル者ヲ視ル。  
冠警帝ナラズ。既ニシテ王室政ヲ為シ。世態一變。  
是ニ於テカ。髻者斷シ。乃者脱シ。燕袷馬袴者。窄袖。  
短衣。頭ニ獺皮冠ヲ載キ。手ニ蠟字冊ヲ挾シ。洋客  
ニ從テ。教ヲ受ル者。之アリ。歐米諸州ニ遊學スル  
者。之アリ。頃者某氏等。民選議院ヲ建テ。以テ王權  
ヲ抑ヘ。ニト欲スルニ及ベバ。則又嚶々附和。口ヲ  
開ケバ。輒曰。民權。民權ト。吁。彼レ嘗テ王威ノ尊ト  
カラザルヲ憤カラズヤ。嘗テ夷狄ノ攘ヒ難キヲ  
憂ヘザルヤ。而シテ乃此ノ如シ。昨非今是。作輟人

東忽チナル

入類

句法變化甚  
ラ可シ

ニ由ル。曾テ婦女子ハ新様ヲ學ブニ異ナラズ。幾  
何ゾ。其ハ俳優ハ愚スル。所ト為ラハ。シヤ。我邦  
開闢以來。形勢數變ズ。而シテ今日ノ變尤モ甚シ  
トス。山口子謙。近世史略三卷ヲ著シ。以テ其變ス  
ル所以ノ者ヲ記シ。嘉永癸丑。洋船入港ニ起リ。明  
治己巳。列侯納土ニ止ル。二十年間。治一亂一動。  
一靜成者。敗者。生者。死者。風雲ニ際會スル者。輾轉  
不遇ナル者。泣ク可ク。笑フ可ク。怒ル可ク。喜ブ可  
キハ。狀。紙上ニ躍出。之ヲ觀劇ハ。淨旦且未ハ。種々  
打扮。而シテ。忠奸好互。歷々辨カ。可キハ。譬フ。則實



一結乃文場  
 奏技ノエナ  
 ル者ニ非ワ  
 レハ成ス能  
 ハサルナリ  
 余亦安リ此  
 篇此処ニ於  
 テ大聲喝采  
 セサルヲ得  
 ンヤ

録ト曰ト雖氏一部ハ傳奇ト作シテ讀ム亦不可  
 ナルナシ。近日坊刻新著汗牛充棟。然ニ大抵依樣  
 葫蘆。洋書ノ餘唾ヲ拾ヒ。以テ時好ニ投ズ。未ダ我  
 レ吾事ヲ記シ。人ノ觀聽ヲ悚ス。此書ノ如キ者ア  
 ラザルナリ。是ヨリ先キ。此書一出。萬衆爭ヒ觀。英  
 人嗟嗒氏翻譯以テ其國ニ傳播スルニ至ル。嗚呼。  
 我レ様ニ彼ニ依ラズ。而シテ彼ヲシテ我様ニ依  
 ラ。使ム子謙亦奏技ハ工ナル者。余大聲喝采セザ  
 ラシト欲スルモ得ニヤ。明治八年春三月。江戶  
 士川田剛撰。

偶評  
 今體名家文抄卷之五 大尾

今體名家文抄卷之五

廿七



明治十年二月十三日版權免許  
同 四月十五日出版

編輯人

兵庫縣士族

土居光 萃

出版人

山梨縣平民

内藤傳右衛門

山梨縣第 一區  
甲府常盤町四番地

010190527935

48 13093



